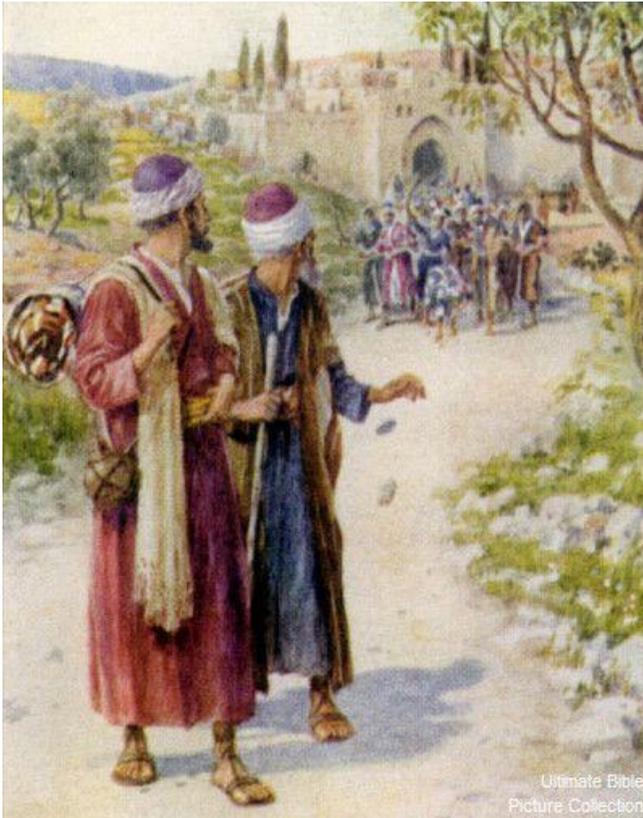


2023年10月8日 説教「主の恵みにゆだねられて」

使徒の働き 15章 30～41節

エルサレム会議で決議されたことは、アンテオケ等の教会に出される手紙の内容が決まりました。異邦人クリスチャンに重荷を負わせないというものでした。また、それを届ける人々も決議されました。



Ultimate Bible
Picture Collection

1. エルサレム会議の通達 (30～35節)

①手紙を喜ぶ人々 (30～31)「さて、一行は送り出されて、アンテオケに下り、教会の人々を集めて、手紙を手渡した。それを読んだ人々は、その励ましによって喜んだ。」

一行というのは、パウロ、バルナバ、ユダ、シラスです。彼らはエルサレム教会から派遣されて、アンテオケに下りました。アンテオケは世界宣教の発進基地であり、異邦人クリスチャンも相当数いる大きな教会でした。派遣された者達は、エルサレム教会で決議されたことを盛り込んだ手紙を手渡しました。すると、それを読んだ人々は、励ましに富んだ内容に喜んだのでした。アンテオケの教会のユダヤ人クリスチャンも喜んだことでしょう。なぜなら、彼らはすでに異邦人の救いを確信していたからです。

②ユダとシラスの働き (32～33)「ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、また力づけた。彼らはしばらく滞在した後、兄弟たちの平安のあいさつに送られて、彼らを送り出した人々のところへ帰って行った。」

ユダとシラスが預言者であったという事は初めて伝えられています。要するに、御言葉を語る賜物を持っている人として認められていたということです。そこで、アンテオケ教会の兄弟への説明はもっぱら彼らが行ったのです。彼らは、その任務を終えた後も、その地にしばらく滞在した後、送り出されてエルサレムに帰りました。34節は原文にはないのですが、異本によると、シラスはそこに残ったとあります。

③パウロとバルナバはとどまり 35)「パウロとバルナバはアンテオケにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のみことばを教え、宣べ伝えた。」

パウロとバルナバは元々アンテオケ教会にいたのですから、そこにとどまりました。そして、改めてその地において主のみ言葉を語り、福音宣教をしていったのです。

2. 宣教地訪問に関する対立 (36～38節)

①再訪案 (36)「幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。「先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」

パウロがバルナバに提案しています。提案内容は、第一次伝道旅行において巡った町を再訪して、様子を見て来ようではないかというものでし

た。彼らが信仰を守っているか。また教会はどのようになっているか。問題が発生していないかなどの点を見て、必要に応じて対処しなければならないという意味も込められていたと考えられます

②バルナバはマルコを (37)「ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。」

ここで思ってもみなかったことが起きていきます。バルナバは慰めの人と言われるほどに、後進を優しく育てていく人でした。バルナバはいどこでもあるマルコと呼ばれるヨハネを宣教旅行になんとしても連れて行って、立ち直らせてあげたいと考えていました。

③パウロの異論 (38)「しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れていけないほうがよいと考えた。」

しかし、パウロは反対しました。なぜなら、マルコは、第一次伝道旅行において、小アジアのパンフリヤにあるペルガで、怖気づき引き返してしまうということがあったからです。パウロは、再び同じようなことがあれば、霊的な士気が下がるので、連れていけないほうが良いと考えたのです。

3. バルナバとパウロによる宣教への出発 (39~41 節)

①反目とバルナバの出発 (39)「そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡っていった。」

こうなるとパウロとバルナバはマルコの処遇を巡って、方針が異なってしまう対立する結果となりました。第一次伝道旅行からエルサレム会議を経て、アンテオケに戻るまでは良好に協働していたのですが、ここに来て両者は別行動をとらざるを得なくなりました。バルナバは、マルコを連れて海路を取り、出身地であるキプロス島へと渡って行きました。

②パウロの出発 (40)「パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。」

一方のパウロはエルサレムでの会議のなかで選ばれ、アンテオケでも異邦人クリスチャンのための仲介役を果たしたシラスを連れていくことにしました。そして、パウロ一行もアンテオケ教会の兄弟たちから、「主の恵みにゆだねられて」、出発したのでした。これからの宣教旅行は一切主の恵みによるものであることを確認したわけです。ここから始まるのが、パウロの第二次伝道旅行です。

③陸路をとったパウロ (41)「そして、シリアおよびキリキヤを通り、諸教会を力づけた。」

パウロ一行は陸路を取り、シリア地方から小アジアの東側のキリキヤを通って行き、行く先々にある教会を訪れては、兄弟姉妹を励ましたのでした。キリキヤ地方のタルソはパウロの出身地ですから、そこにも立ち寄ったことでしょう。

《結論》今朝の箇所には、聖書だからこそという内容が記されています。つまり、バルナバとパウロという、代表的クリスチャンとも言える二人が反目して、それぞれが別の道に進んでいったという記述です。読んでいて、あまり気持ちが良いものではありません。この書を記したルカは、こうした出来事を記さずに、それぞれが新しい宣教に出て行ったという結果だけを伝える事もできたでしょう。しかし、ルカは聖霊に導かれながら、それを隠すことなく、そのまま記すように導かれたのです。聖書には、ここに限らず、人間の罪の露わな側面が表されているところがあります。たとえば、ダビデの罪のことなどは、彼をどこまでも高邁な信仰の人として描こうとすれば、その記述は外されたことでしょう。しかし、ダビデがその罪を犯していった経過と、その罪を指摘され、悔い改めていくといったところにこそ、信仰の神髄があればこそ、ありのままに記されているのです。逆に言えば、そうした記事をなくしたら、聖書はそのいのちを失ってしまうかもしれません。

パウロはシラスを連れて陸路、バルナバはマルコを連れて海路をとって宣教へと出かけて行きました。それでは二人のその後の関係はどうであったのかというと、それは記されていません。ただ、パウロはバルナバの働きを評価していたことが記されています。また、バルナバとの宣教活動を通して、マルコは霊的成長を与えられていったようです。そして、パウロもマルコのことを受け入れていたことが、コロサイ人への手紙 4:11 から知る事ができます。そして、何と言っても、その後にマルコが「マルコの福音書」を記すまでに導かれていったことは、マルコがクリスチャンとして成長し、用いられていったということを私たちは知ることができるのです。聖書は注意して読むと、そのような麗しいことが浮かび上がってくるのです。

私たちは今朝、もう一つのことを学びたいのです。それは 40 節からです。パウロとシラス一行は陸路をとり、小アジアを経ての伝道旅行へと旅立ちました。その時に、アンテオケ教会の「兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した」とあります。それでは「主の恵みにゆだねられて」とはどのような意味なのでしょう。恵み(カリス)とは、喜び、楽しさ、愛に満ちた事、好意、といったことを含みます。そして、それらの源は天の神様の内にあるのです。また、それらを天上より地の民が賜る時に、恵みに満ちた出来事が起きてくるのです。この聖書箇所では、アンテオケの兄弟姉妹が、パウロたちを送り出すにあたって、皆で祈ったのでしょう。その時のことを一言で言えば、主の恵みにゆだねることだったのだと思われます。つまり、これからの宣教はただ主の恵みがあればこそ進展するもので、決して人間のわざではないということが確認され、祈られたのです。私たちの宣教や個人の生活も同じです。教会は主を礼拝しつつ、宣教していく時に、主の恵みを頼りにしていけば、事は進みます。この秋からクリスマスにかけての宣教においても主の恵みをいただいているだけではありませんか。また、各自の生活も主におゆだねして恵みいただき、祝福していただきましょう。